

「学科の学位プログラムレベルと科目レベルで学習成果の達成状況を評価し査定（アセスメント）する」

日時：令和2年3月6日（金）14：40～16：30

担当：村上知子 森田ゆかり

参加者：太田、吉岡、石野、ウエスタハウト、百海、中村、三浦、水上、村上、森田、米川

アセスメントポリシーについて、今年度3回目の研修会である。今回は以下の2件について話題提供があり、教員間で話し合った。

（1）2019年度後期成績分布状況からのアセスメント 話題提供：村上
2019年度後期の成績分布状況の資料を見ながら、教員間で話し合った。

主な意見は以下の通り。

- ・絶対評価であるので、科目によって評価分布の違いがあってもいい。
- ・選択科目については、担当者間で評価の基準をある程度共通した方がいいのではないかな。
- ・学生にとって、15回の授業終了後に評価を受けるだけではなく、途中で（8回目くらい？）授業担当者から中間評価を受ける方が意味のあることになるのではないかな。
- ・自分の求めている力が学生についている場合、評価をAと判定するかBと判定するか迷う。
→この評価基準の迷いを、ルーブリックで解決できるのかな？

（2）ルーブリック（シラバス）から考える学習評価の可視化 話題提供：森田
シラバス（森田作成）中のルーブリックを資料に、教員間で話し合った。

主な意見は以下の通り。

- ・幼教の場合、「～できる」のような数字で評価できる力ではない部分を求めることが多いので、可視化できる評価項目を考えることが難しい。
- ・東海短大のAP報告の中でも、評価をシステマティックすればするほど、幼児教育には馴染まない感覚を得たという内容があった。
- ・教育の評価には主観が入ってしまうものなので、担当者自身の評価の視点をはっきりさせる意味でルーブリックを使うことになる。
- ・「評価ルーブリック」の部分（評価の観点）を考えることが大切。
- ・本学シラバスのルーブリックは4段階になっているが、学生への評価は5段階（S-A-B-C-D）である。ルーブリックが4段階の意味は何なのか？→教務に確認する。
- ・「要努力」は、Cと評価するか、Dと評価するか？…文言的に「～していない」はD評価に値する。「要努力」はC評価に値する内容にすべきではないか。

